

心理学研究方法論をめぐる省察： 三心理学の原定式化の再検討，統合化への「理論的構造」

吉田章宏*

はじめに

今年も学部紀要論文の執筆に集中する時期がやって来た。昨年までの本学の淑徳大学学部紀要と淑徳大学研究科紀要に寄稿した論稿は、全体として、既に7本となっているが、そのうち、「心理学研究方法論をめぐる省察」と題した論稿が計5本ある。そこで、はじめに、それらの論稿について、簡単に振り返り、それら一連の論稿の流れにおいて本稿が占める位置とその意味を明らかにし、これから進むべき道を、確認したい。「心理学研究方法論をめぐる省察」を共通の表題とする、以下に挙げるA稿からE稿までの5本の論稿を、相互に区別するために、それぞれの副題で表示することとする。

A稿：副題「心理学の人称性：我，汝，誰彼の心理学」（吉田章宏，2002）研究科紀要

B稿：副題「心理学の多種多様性について」（吉田章宏，2003a）学部紀要

C稿：副題「三心理学の不連続化と連続化の道」（吉田章宏，2003b）研究科紀要

D稿：副題「多種多様な心理学の統合の可能性」（吉田章宏，2004）学部紀要

E稿：副題「多種多様な心理学の統合は何故必要か」（吉田章宏，2005）学部紀要

F稿：本稿（吉田章宏，2006a）2005年度 学部紀要

さて、上記のように本稿をF稿と名づけるならば、昨年2004年度のE稿を記し終えた時点では、本年度執筆の本F稿では、「こころ」をめぐる心理学的省察を記す心積もりであったが、それは、現在の段階では、いまだに準備不足状態にあると自覚し、いずれ準備がより整う今後の機会に譲ることにした。“First thing first.”の格言に従い、是非とも書いて置きたい論点から先に手を付けようと思うからである。論点は、二つある。

第一は、心理学における人称性についてである。A稿で、心理学には人称性があることを指摘し、「我心理学」、「汝心理学」、「誰彼心理学」の三つの心理学の区別を指摘し論じた。そして、C稿で、これら三者の間の不連続化と連続化の可能性について記した。B稿で

* 淑徳大学総合福祉学部教授

は、三つの心理学の可能性とは別個に、現実の心理学の歴史における混沌とも見える心理学の多種多様性を指摘し、その多種多様性が、「ものの見方」(a point of view)と「素材内容」(subject matter)によることを指摘し、「見えないもの」である心理学の素材内容を「見えるもの」にする「ものの見方」の、心理学における重要性を説き、心理学の魅力の意味づけをした。そして最後に、多種多様性を統合する「より大きな理論的構造」の可能性を示唆した。それを受けて、D稿では、そのように多種多様な心理学を統合する「より大きな理論的構造」の必要性と可能性を探索した。心理学における「相互蔑視」を生んでいる状況からは、そのような理論的構造を求める試みは、最初から挫折の運命にあることが明らかとなる。そこで、現実から距離を置いて眺め、いわば系統発生と個体発生の論理で、人類における「心理学」の歴史の「展開」と、個人における「心理学」の「発達」との対応関係、そして、心理学研究の歴史継承と世代継承の対応関係のイメージを素描し、心理学が心理を変化させることによる、心理学の「本質的未完結性」を指摘した。そして、E稿では、A-Cの流れと、B-Dの流れを合流させ、心理学の多種多様性の源泉を探り、その「統合」を求めるのは何故か、また、それを求めるのはどのような誰であるか、を省察した。

これらの議論は、それぞれに、それなりに正鵠を得ていると、2005年秋現在の私は、考えている。しかし、さらに、心理学の研究のあり方をより具体的に考えてみると、A-C稿で提示した三つの心理学の区別には、実は、不十分な点が幾つかある。そのことが次第に明らかになって来ている。そして、その不十分さを明瞭にすることが、心理学の研究手法への新しい「ものの見方」を開き、心理学の「統合」への道を開くのではないか、という思いが生まれてきた。そこで、このF稿では、三心理学のA-C稿における不十分さを同定し、その不十分さの克服を超えて、「統合」に近づく道を模索し、記しておきたいと、考えた。

第二に、是非書いておきたかったのは、心理学の人称性に伴うと考えられてきた研究方法の制約の再検討である。より積極的には、そうした研究方法の制約の克服と撤廃の問題である。これについては、第一の問題を展開する本稿で既に紙幅を大きく超えることになってしまったので、稿を改めて論じることにする。

「三つの心理学」の最初の定式化、「原定式化」(2002)について

「三つの心理学」の最初の定式化(吉田章宏, 2002年, (A稿))では、つぎのように述べていた。「私は、心理学の在り方に、少なくとも論理的な可能性として、人称態による『三つの心理学』(『我による「私の心理学」』, 『我による「汝の心理学」』, および, 『我による「彼(誰彼)の心理学」』)の区別を考えなくてはならない, と確信するに至った。…[今後は, 便宜上, それぞれを, 『我心理学』, 『汝心理学』, 『誰彼心理学』, と略称する。](同上, 55ページ)。

現時点での私は、私自身としては、以上の定式化に、——以降はこの定式化を「原定式化」と呼ぶことにする。——不満もなく、特に修正の必要も認めない。しかし、「便宜上」「略称する」ことを選んだために、当初は予期していなかった誤解を生む余地を残したことになってしまった。そこで、原定式化の不十分さについてここにまず述べて、原定式化を改善する余地を明示化するとともに、原定式化の含意するところをさらに解明することに努めたい。

「三つの心理学」の「原定式化」の不十分さ、改善の余地

さて、上に引用紹介した「三つの心理学」の原定式化の区別は、人間が人間を研究する、心が心を研究する、という独自の性格をもつ心理学という学問においては、極めて本質的な区別であって、原定式化は、基本的には、正鵠を射たものである、と私は今も信じている。このことを、まず再確認し強調しておく。

しかし、あの原定式化が、仮に心理学研究の事態そのものの区別としては正鵠を射ているとはしても、区別を表す表現、心理学研究が置かれる社会的状況、研究者と被研究者、研究報告の書き手と読み手、人間の自由で豊かな想像力、多様な状況下での人間関係など、原定式化の内的な地平と外的な地平とを構成する諸条件までを考慮すると、定式化とその表現が不十分であったことが、私には、次第に明らかになって来た。そして、その不十分さに起因する、原定式化に対する誤解の可能性も、一層よく見えて来るようになった。さらに、誤解の可能性を明らかにすることが、ひいては、三つの心理学の「統合」へと繋がる道を開くことにもなる可能性が生まれてくることにも、気づいたのである。では、まず、原定式化の不十分さは何処に在ったか。現在の私の考えるところは、以下の通りである。

1) 第一に、総ての研究の「我性」ということの確認と強調の不足。原定式化においては、現象学に親しんでいる筆者によるため、総ての研究があくまでも「我による研究である」ということが、自明のこととして暗黙のうちに前提されていた。「我による『私の心理学』」などと一応は記しているにもかかわらず、しかし、「総ての研究は、我による研究である」とする洞察を明示化し確認し重ねて強調しておくことによって、起こり得る誤解を予め避けておく必要があるのだ、という慎重な配慮に欠けていた。

2) 第二に、研究の語りの表現が取りうる多様な可能性への配慮の不足。研究事態そのものの定式化をして、相互の区別はしていても、その研究の過程と結果を語る報告において、その区別がどのように多様に表現され語られうるか、その可能性について、配慮をめぐらせてはいなかった。

3) 第三に、研究の語りの表現を読む読みの多様な可能性への配慮の不足。語りの場合と同様に、その研究を多様に語る報告を読む場合にも、その区別をどのように多様に理解し、多

様に読みうるか、その多種多様な可能性について、十分な配慮をめぐらせてはいなかった。

4) 第四に、研究者「我」が「我、汝、誰彼」に取りうる心理的距離の多様性への配慮の不足。区別された三つの心理学のそれぞれにおいて、研究者である我は、研究される対象である「我、汝、誰彼」のそれぞれに対して、多様な「近さ」あるいは「遠さ」を、つまり多様な「心理的距離」を、取りうるということに、十分な配慮をめぐらせていなかった。「心理的距離」がもつ、多様な語りにおける表現の多様な可能性、および、語りの表現の読みにおける多様な可能性、これら両者への配慮が不十分であった。

5) 第五に、研究の「生産、流通、消費」の全過程（吉田章宏、1984）の解明の不在。研究がなされ、その研究について語られ、その語りを読み手が読み、読み手によってその研究が理解される、そして、その研究が何らかの意味で活かされる過程が考えられる。この過程全体を視野に入れて、「三つの心理学」が、相互に入り組んだ関係にあること、その関係を解きほぐすと同時に、その相互の入り組んだ関係にもかかわらず、「三つの心理学」の区別と相互関係は、心理学の研究にとって極めて本質的で重要であることを、解明して明確化し、確認することを怠っていた。

6) 第六に、認識における、そして、その表現の授受における、主体と客体、主観と客観の相関性への明示的な言及と強調の不在。この相関性そのものは、従来、多種多様な仕方で理解され表現されている。しかし、原定式化は、この相関性に明示的には言及しておらず、したがって、それに配慮したとき、それにもかかわらず、「三つの心理学」の区別が、どのように保持されうるかを、明示的には、明確化していなかった。

7) 第七に、心理学の人称性について、現実と虚構それぞれにおける人称性と視点の変換の関連を明示的に視野に入れることを怠っていた怠慢。人称性は、虚構においては極めて顕著に現れる。例えば、文学芸術としての小説の理論においては、漱石の『文学論』にも見られるように、人称性、あるいは、視点性は、その中核を占める。そして、実は、自他の心を研究主題とする心理学においても、人称性と視点性は、不可避的に、認識と表現を規定する中核を占める。虚構を扱う芸術においては、視点の変換は自由自在であるのに対して、現実を扱う心理学における現実の研究者による、現実の視点の変換には、大きな制約が伴う。ここには、「人間科学としての心理学」における、現象学で言う、「想像自由変更」という方法の問題が浮上してくる。そして、この背後には、自然科学と人間科学の対比をめぐる「科学」とは何か、という巨大な問題が潜んで控えている。

8) 第八に、三つの心理学の本質的な相互内属性を、明示的に解明しておらず、したがって、配慮が不足していた。三者の相互内属性は、視点を変えれば、我、汝、誰彼の相互内属性に基づくものである。「原定式化」には、「我（自己）の内なる他者」、「他者の内なる我（自己）」、あるいは、「自己としての他者」、「他者としての自己」、という視点の明示化が不足してい

た、ということである。そのことが、三つの心理学の不連続性と連続性とを考察する場合にも、三心理学の間の外的な不連続性と連続性に着目して主題化して考察するに留まり、どの一つの心理学にも内在し共在している他の二つの心理学という内属性の問題への着目と、その明示的な主題化がなされていなかった。

9) 第九に、そのことによる、三つの心理学の統合的組織化と体系化に向けた道筋が主題化されておらず、見えて来ていない、という不十分さ。外的な不連続と連続のみが主題化されているだけでは、そこから生まれる三心理学の統合は、どれ程もがいて見ても、結局、本質的に異質なものの並置と「竹に木を接ぐ」接合という仕方を超えることは困難であろう。それでは、三つの心理学が原理的に一つの心理学に真に統合される道を、見いだすことは困難であろう。そのことは、「連続化と不連続化」として三者を関係付けることを越えて、「意味化と構造化」として、三者を統合化することへと向かわなくてはならないことを意味する。このことが、これまでの論稿を進める過程で次第に明らかになってきた。

10) 第十に、三つの心理学の連続性と相互内属性を基盤に置く、目指すべき「高峰」としての、一つの統合的な心理学の可能性が視野に入ってきて相互に共有されることになれば、それぞれの「研究方法」に関しても、統合が実現する以前における三心理学の間での相互交流として、統合に向う方向への具体的動きが可能となってくる、ということの自覚の不足。

11) 第十一に、三つの心理学の統合において、中核となるべき心理学がどれかという点についての曖昧さ。三つのどれかが対等なのか、あるいは、そのいずれかが、基本的に中核となり支柱となるのか、その点について、曖昧であった。現在の心理学における「我=我・心理学」の貧困と欠落を指摘し力説して来たにもかかわらず、心理学の中核には、「我=汝・心理学」がなるべきであろう、と現在の私は考える。人間は「人間」という語が示すように、そもそも社会的存在であることを基盤に据えるべきだ、と考えるからである。また、「我=汝・心理学」は、人間のあるべき姿、倫理の問題に最も近づくことが出来る、と考えるからでもある。これは、心理学を「解放倫理実現」という性格をもつ「人間科学」の一つとして性格づけることに繋がっている。このことについては、私は、最近知己をうることになった George Kunz (1998) による“Radical Altruism”に基づく Psukhology (同書, 10-12) の構想によって、大いに啓発された。

12) 第十二に、我、汝、誰彼 (I, You, S/he = Anybody) の関連による三心理学の原定式化、その拡大あるいは延長の可能性の明示的な自覚の欠如。三つの心理学を基本形とするとしても、さらに、それに加えて、代名詞で性格づけるならば、(We, You, They, It) によって、定式化する可能性があり (例えば, Kaufmann, 1970, 14), その可能性についての明確な自覚と配慮が欠けていた。

13) 第十三に、心理学全体の将来像の自覚的明示化とそれから生まれる三つの心理学それぞ

れの意味と意義の自覚化と明示化の欠落。すなわち、心理学という学問全体は、人類の歴史における人間心理の研究におけるあらゆる多種多様な可能性を包含し、まさしく「多様性を通じての統一性」(Unity through Diversity)を実現する学問として、基本的には、三つの心理学の何れをも活かして、多様性を体現する三つの心理学を統合する統一性として、将来に向けて構築されて行くべきである、という洞察が、明示的には自覚されていなかった。そのため、逆に、遠未来における、その統合的な将来像から遡行して、近未来における、これからの三つの心理学のそれぞれが担うべきそれぞれの意味と意義を明示化する方向が自覚されていなかった。

14) 第十四に、三つの心理学それぞれのうちにも、相互に異なる存在理由をもつ多様な心理学の可能性があることの自覚化と明示化の欠落。三つの心理学それぞれの内部に、その存在理由、あるいは、成就しようとする目的動機が異なる心理学が存在しうる。それゆえ、三心理学の次元に加える新たな別次元として、先にE稿において提示した四種の学問、すなわち、「因果分析科学」、「目的達成技術」、「人間理解教養」、「解放倫理実現」の区別を加えることができる。そこで、 $3 \times 4 = 12$ 種類の「心理学」を区別することも出来ることになる。目的動機の種類についての明示化以前の原定式化においては、このような区別の自覚も定式化も、当然のことながら、出来ていなかった。

15) 第十五に、仮に、14)で示された($3 \times 4 = 12$)の区別を承認したとすると、それら12種類心理学間の相互遷移の可能性と、遷移それぞれの実現の展開可能性、それぞれの種類から出発して次第に統合された心理学への発展的統一の可能性、などの問題が発生する。そして、そのような問題そのものが、原定式化では、これも当然のことであるが、自覚化も明示化も、そして、定式化も出来ていなかった。

16) 第十六に、以上のような、多種多様な心理学が、それぞれの狭い視野のゆえに安らっている現在の「地域性」「田舎性」あるいは「田舎くささ」(ルビンシュテイン, 1960, 上, 28)から脱出し、相互の特色を一層活かす「全国性」「世界性」「人類性」へと、「多様性を通じての統一性」の構想へと結集するよう誘って行く道への展望に欠けていた。

17) 第十七に、以上のような多種多様な心理学の統一化の構想を実現するためには、ある段階において、多種多様な心理学の研究に従事している「多種多様な心理学研究者を理解し説明する心理学」を実現し、つまり、「多種多様な心理学研究者を対象とする心理学」、「心理学者による<心理学者の心理学>」を実現し、心理学の将来の統一化への道を共に歩みながら、心理学者たちとの相互理解を深める必要がある。その必要性の明示化が欠落していた。

問題点は、原理的には、限りがない。しかし、とりあえず考えられる原定式化の不十分さの指摘を、以上に留める。これらの不十分さは、つまるところ、一つの根源に発している。

すなわち、「三つの心理学」の区別の原定式化が、我=我、我=汝、我=誰彼、という研究事態そのもの実在的で論理的な基本的区別のみ焦点を当てて、その区別の範囲に自己充足してしまい、その研究事態から起こりうる多種多様な現実性と可能性に即して、心理学の将来へ向けての展開像を、展開することは怠っていたということであろう。しかし、これらの不十分さは、三つの心理学の原定式化が、とにもかくにも、定式化されたからこそ、気づかれることになったのだということも、また、指摘しておかなければならない。そして、それぞれの問題は、考え始めると、それぞれに、巨大な問題に発展していく可能性を秘めていることがわかる。そこで、ここでは、消極的には、これらの不十分さに起因する誤解の可能性を予見し、防止し、克服して行く道を探索することを目指し、そこから、さらに積極的に、三心理学統一の構想を、可能な限り簡潔な素描として描くことに努めたい。

原定式化の不十分と、その克服への道：統一への一構想

上に挙げたそれぞれの不十分さについてコメントし、その不十分さを克服する道を、まず探ってみよう。そこから、三心理学の統一への構想を、探究してみることにする。

一) まず、第一に、総ての研究の「我性」について。「三つの心理学」は、そして実は、あらゆる心理学の研究は、すべて、究極においては、一人の「我」によって為されている。多種多様な心理学に創始者の名前がついていることにも、「我性」が露呈している。しかし、「三つの心理学」の原定式化においては、この「我性」を力説して表面に出すことはしていなかった。そのため、次のような誤解を生じる余地が生じた。つまり、研究者である「我」が、汝あるいは誰彼の一人である人間に、やはり一人の「我」として、自らを語ってもらって、その語りに基づいて研究するのも、やはり「私の心理学」であるだろう、という誤解である。これは、「三つの心理学」の原定式化の本質に全く反する誤解である。たとえば、かつてのテッチェナー流の内観主義心理学は、研究者テッチェナーとは異なる他者である被験者に「内観報告」を求め、その報告を基礎資料として心理学を構築しようとしていた。これは、ここで言う「我心理学」ではない。そうではなくて、研究者である「我」が、自分自身である「我」を研究するのが、「私の心理学」である。研究者である「我」が、(A) 他者である「汝」の一人、あるいは (B) 「誰彼」の一人、を取り上げ、それぞれに、一人の「我」として自らを語ってもらい、つまり表現してもらい、その表現を通して研究するのは、「我心理学」ではないのである。それは、あくまでも、それぞれに (A) 「汝心理学」あるいは (B) 「誰彼心理学」である。ここで、「我、汝、誰彼」という区別は、あくまで、研究主体である「我」との関係における研究対象による区別なのである。心理学研究の主体である研究者の「我」が自らを研究対象として研究するのが「我=心理学」であり、「我」にとっての「汝」を研究するのが「汝=心理学」、 「誰彼」を研究するのが「誰彼=心理学」である。これは、上述

のごとく、研究という認識と表現をつくるのは、常に「我」であるという自明の前提を明示化しなかつただけなのである。そこで、例えば、「私の心理学」と呼ぶことによる誤解を防ぐためには、冗長さを厭わず、やはり、荻野恒一（1964, 207-208）に倣って、丁寧に「我による『私の心理学』』と言うべきなのかもしれない。あるいは、「私の心理学」とは「研究主体である我が、我自身を研究対象として、研究する心理学である」などと明示的に表現するのがよいかもしれない。そして、三つの心理学を、誤解を生じやすい略称を避けて、それぞれに、例えば、「我=我・心理学」、「我=汝・心理学」、そして、「我=誰彼・心理学」などという名称に表現を改めればよいのかもしれない。この誤解は、「私の心理学」という場合、「の」という言葉が、所有格（「我による研究」あるいは「私の為す研究」の意）と目的格（「我を研究する」の意）のどちらをも表しうるといふ事情にもよるのであろう。外国語、例えば、英語の“of”にも、同様の両義性がある。さて、以上のように研究主体と研究対象とを明示化するならば、現代の心理学の主流は、「我=他者・心理学」、つまり、我にとって「汝」であるか「誰彼」であるかの違いはあるにせよ、「他者を研究対象とする、我による心理学」となっている、ということが明白となるであろう。同時に、「我を研究対象とする我による心理学」が現代心理学において不在であることが際立ってくるであろう。それが、C稿の主要な論点の一つであった。

二) 第二の、研究の語りの表現にみられる多様な可能性に起因する誤解とは何でありうるであろうか。研究の過程やその結果を語るに当たって、研究主体である一人の「我」は、研究客体を表現するのに、表現としては、「我、汝、誰彼」のいずれをも用いることが可能である。例えば、「我」が「我」を研究した後、その結果を語る時、我について知りえた知見を、あたかも「汝」についての知見であるかのように語ることもできれば、「誰彼」についての知見とすることも、あるいは無名あるいは匿名の対象者についての知見とすることも、「語り」としては可能である。そのことは、「我」が「我」自らを研究したという研究事態とは、相対的に独立して、表現上は、可能なのである。例えば、「我は我を観察するに、怒りの感情の最中には、その怒りを冷静に観察することは、困難である」という洞察を仮に得たとして、その洞察を、「我は汝を観察するに…」あるいは、「我は誰彼を観察するに…」と表現し直すことは容易に出来る。しかし、その洞察そのものが、「我を観察する」という研究事態において得られたものであるならば、それは、本質的には、「我=我・心理学」であることは、明白であろう。ひとは、そのように、研究の語りにおいて、「我」、「汝」、「誰彼」の表現を相互に自由に書き換えることが出来る、そして、現実には、そのように書き換える可能性もある。では、そのように書き換える可能性が生じるのは、研究主体である我における如何なる動機によるものであろうか。この動機の問題は、匿名性の問題、筆名の問題、偽名の問題、虚構の問題、などに関連してくる（吉田章宏, 2004b, 2005b）。が、要するに、言語

表現としては、語りにおいて、「我」、「汝」、「誰彼」を相互に置き換えることが可能であり、また、その置き換えには、それなりの動機が存在しうる、ということである。しかし、語りの言語表現がいかようになろうとも、「我」が「我」を研究して得られた心理学的事実あるいは洞察は、あくまで、本質的には、「我＝我・心理学」なのである。そして、「我＝汝心理学」についても「我＝誰彼心理学」においても全く同様である。ここに起因しうる誤解は、言語表現のみによって、「三つの心理学」を区別しようとするところから生じやすい。例えば、研究対象の「我」を「誰彼」と表現しているからと、「我＝我・心理学」を「我＝誰彼心理学」と混同してしまうという誤解である。この誤解の問題は、言語表現の置き換えの自由さと置き換えの動機についての洞察をもとに、解決しなければならないであろう。三つの心理学相互の区別は、あくまで、研究主体「我」と研究対象の「我」、「汝」、「誰彼」によるのであって、単なる、表面的な言語表現によるのではない、ということを明確にすればよいであろう。それは、認識のあり方による区別であって、それとは相対的に独立させることが可能な「認識の言語表現」、「我、汝、誰彼という言語表現」のみによる区別ではない、ということである。したがって、例えば、「我＝誰彼・心理学」を装った「我＝我・心理学」が在り得る。それは、我が我を研究対象として研究した結果を、「我」を対象とした研究であることを明言せずに、「誰彼」についての結果であるかのように、語る、という場合である。例えば、詳細は省くが、ヴィゴツキーの『思考と言語』（1962/1934）の例えば「第五章」における、例えば、「混同心性的連結」、「複合的思考」、「擬概念的複合」、「概念的思考」などの思考の分類には、そのような趣が在ると私は考える。それは、それ以外の仕方では得られるとは考えにくいような洞察がそこに示されている、という意味からである。また、フッサールの『経験と判断』（1975/1939）の叙述（例えば、訳書75-88ページの第21節）は、もしそれを「心理学」と呼ぶとするならば、明らかに、「我＝我・心理学」であるのに、そのことをあえて明示化せずに、あたかも「我＝誰彼・心理学」であるかのように叙述し、展開していると言えるように、私には思われる。一つには、語りには人称の書き換えに相対的な自由があることが、そのことを可能にしている。

三) 第三に、研究の語り表現の読みの多様な可能性に起因する誤解の可能性は何か。上の第二の「研究の語りの表現における多様な可能性」に対応して、語りの表現の読みにおいても、読み手には、「多様な読みの可能性」が開かれている。研究の語りにおいて、研究対象としての「我」、「汝」、「誰彼」を言語に表現するに当たって、相互に置き換えることが可能であるのに対応して、逆に、同じ研究の語りを、その読みにおいて「我」、「汝」、「誰彼」を相互に置き換えて読むことも可能であることは多言を要しないであろう。そして、そのように読み換えることにも、多様な動機がありうる。それは、研究の語りにおいて、置き換えが可能である、ということが前提となる。そして、そうした置き換えがなされた表現を、読みに

において、再度、置き換えることによって、研究事態そのものを復元し、そこから研究報告の意味を読み取ろうという動機の可能性もある。あるいは、多様な読みそのものから、読み換え無しでは読み取れない事実あるいは洞察を読み取ろうという動機もありうるであろう。また、読み換えそのものによる多様な意味の出現を愉しもうという動機もありえよう。さらにまた、語りにおける書き換えがありうる以上、読みにおける読み換えこそが、研究事態とその洞察の真実に迫れる、という場合も有り得よう。重ねてさらに、特に日本語においては、主語を明示的に示すことを避ける傾向がある、ということも、留意しておかなくてはならない。もちろん、読み換えが、あらぬ誤解を生み出す場合もあるであろう。そこで、再び強調されなければならないのは、原定式化における「三つの心理学」の区別は、あくまで、研究事態における研究主体と研究対象の関係による区別であって、書き換えあるいは読み換えるの可能性を孕んだ言語表現による区別ではない、ということである。とはいえ、研究事態とそこからの洞察は、読み手には、言語表現を通じて得られるものである。このことを考えると、言語表現の読みにおける読み手の洞察力と読みの力、限定的には「書き換え」の可能性への洞察と多種多様な「読み換え」の可能性への洞察、が極めて重要である、ということになる。誤解は、以上によって、理論的には解消できる。が、実践的には、読みにはつねに誤解の可能性が伴っている、ということになるであろう。三つの心理学の区別そのものは、以上をもって、より一層正確かつ明確になった、と言えよう。このことは、しかし、それぞれの心理学の発生における出自の人称性を正確に明らかにするのは、極めて困難であること、「読み換え」には、鋭い洞察力が必要とされ、しかも、その点に関しては、誤りが紛れ込む可能性も否定しきれない、ということになる。私が、上記のように、ヴィゴツキーの『思考と言語』に「我=我・心理学」が見られるとか、フッサールの『経験と判断』が「我=我・心理学」であると判断するのも、ここで言う「読み換え」であり、当然のこと、この判断にも「誤り」の可能性は否定できない。しかし、この私の「読み換え」は、それらの研究には、「我=我・心理学」でなければ到底獲得できないような鋭く深い洞察が含まれている、と私が洞察した結果に拠るものであって、ここに、「誤り」の可能性を認めつつも、ある確信をもって、そのように主張するものである。さらに積極的に言えば、以上の「書き換え」と「読み替え」の可能性は、三心理学の「多様性を通じての統合性」への道の一つの基礎となりうる、とも言える。この誤解の可能性は、新しい統合可能性の萌芽ともなりうる、ということになる。ちなみに、1980年当時、米国における現象学的心理学の中心だったPittsburghのDuquesne大学の大学院修士課程では、Husserlの『イデー』が、Paul Richer博士による「心理学の基礎」と呼ばれるコースでテキストとして使用されていた。そこでは、『イデー』は、いわば哲学書としてではなく、心理学書として、言い換えれば、あたかも、W. JamesのPrinciples of Psychologyにおけるあの有名な「意識の流れ」についての叙述を読むかのように

読む、ということが行われていた。この「読み換え」は、「誤解」による、というよりは、むしろ「読みの自由さ」を積極的に活かした読みの選択というべきで、こうした「読みの自由さ」の活用は、三心理学の心理学への統合に積極的な意義をもつ、と私は考える。

「行間を読む」あるいは「眼光紙背に徹する」「読みの力」、さらには「形象化する想像力」などが三心理学の統合化にもつ意味の問題は大きすぎるので、ここでは言及するに留める。

四) 第四に、研究者「我」が「我、汝、誰彼」に取りうる心理的距離の多様性。研究主体である「我」が、研究対象である「我」、「汝」、「誰彼」に対して採り得る「距離」、「心理的距離」は、多種多様である。「我」が最も近く「誰彼」は最も遠い、という風に単純に一義的には行かないのである。むしろ、この「距離」が多種多様であることこそが、人間の心理の多彩で絢爛たる豊かさを成している、と言えるのではないだろうか。例えば、「我」にとって「我」が最も近い距離にある、というのは常識である。しかし、「心理的距離」の経験としては、「我」が自ら、「我」に第一人称的に関わりながら認識につとめても、超えがたい距離感があって、極めて現実感の薄い、浅い関わりしか持てないという、いわば「分裂的」な場合もありうるであろう、しかしまた、まさしく、「我」についての「我」ならではの到底有りえないような距離感の近い、激しくも深く生き活きとした一体感の経験の場合もまた、ありうるであろう。逆に、三人称的関係の場合でも、——つまり、「我」が「誰彼」に関わる認識を行う場合でも、——それにも拘わらず、深い共感に基づく胸打ち震える深い体験の場合もあれば、逆に、全くただただ第三人称的というよりほかないような、冷たく遠い距離を置いて冷ややかに斜に構えて眺めるだけの関わりのみである、という場合もありうる。こう考えてくると、原定式化による「三つの心理学」の人称性による区別は、まだまだ表面的であった、と言わなくてはならない。むしろ、次のように考えるのがよいように思う。すなわち、「我=我」、「我=汝」、「我=誰彼」の三様の多種多様な関わりにおいて、「我」なる人間には、いかなる体験を生きることができるか、その具体的な姿の有様を、まず、明らかにして行くことが目指さなければならない、と。それ以前に、独断的に、三つの心理学が、その心理的距離においても、一義的に、近から遠へと固定的に秩序付けられる、としてしまうことは、常識に囚われて、現実に即して「ありのままの姿」を見損なった、大きな誤りであることが明らかになる。むしろ、比喩的に言えば、「我的心」は、「我」、「汝」、「誰彼」の間を、深くも浅くも、豊かにも貧しくも、熱くも冷たくも、自由自在に飛び回れるのであって、「我=我」、「我=汝」、「我=誰彼」の三つの心理学は、それぞれに、主体と客体の間の、主観と客観の間の、心理的距離に関しても、多種多様な可能性を秘めているのである、と。そのように飛び回る「我的心」こそが研究主体たる「我的心」なのであって、その飛び回る世界、飛び回られる世界を明らかにすることこそが、三つの心理学それぞれの内実を成すのである、と。それゆえ、三つの心理学は、それぞれに、容易には汲み尽くしがたい豊かさを

秘めているのである。その豊かさを明らかにすることこそ、三つの心理学それぞれの課題なのである。しかし、そのことは、三心理学の原定式化の解消に繋がることではなくて、むしろ、原定式化を保持することによってのみ、それぞれを豊かに明らかにするという課題が正しく位置づけられ意味づけられることになるのである。

そのように考えるべきことが、私には、ようやく明らかになってきたように思われる。

五) 第五に、研究の「生産、流通、消費」の全過程の解明の不在。如何なる心理学研究も、その外的地平を視野に入れるならば、研究の発生、いわば「生産」のみで終わるのではなくて、社会と歴史と文化において、当の研究者以外の人間たちによって読まれ活かされる、「流通」と「消費」の過程まで視野に入れて、三つの心理学とその区別が、その全過程でどのような意味をもつかを予期しておかなくてはならない。まず、直ちに指摘できることがある。それは、心理学において、三心理学の区別そのものの自覚が自明のこととはなっていなかったことに対応して、三心理学の区別は、流通と消費の過程においては、ほとんど消滅してしまう、ということである。これは、言葉を変えて言えば、研究の「生産」においては、例えば、「我=我・心理学」は、現代の心理学において、実証主義の制度化のもと、ほとんどタブー視されている。にもかかわらず、「流通」と「消費」の過程では、「科学的研究」であるとのレッテルを保持したまま、一般社会人においては、三心理学の混同が起り、「我=汝・心理学」も「我=誰彼・心理学」も、「我=我・心理学」として、読み換えられてしまう可能性がある、ということである。もちろん、その逆も起りうる。こうして、三つの心理学によって「生産」された「知識」は、それぞれに確認と確信の根拠が異なるにもかかわらず、「流通」過程で、その「生産地」が混同され、「消費者」によって、自由に読み換えられてしまう、ということが起こる。三者の根本的な相違を認める以上、この区別を明確にするとともに、いわば、「生産地」の表示を明確にしたまま、流通させ、消費することを、可能に行かなくてはならない。それは、三つの心理学によって共通に確認された「知識」とたった一つの心理学によって確認された「知識」では、多種多様な確認状況によって、それが抱かせうる確信の程度、信頼度、活用の可能性などに、相違が出るはずだ、ということから導かれる。

六) 第六に、認識における、そして、その表現の授受における、主体と客体、主観と客観の相関性への明示的な言及と強調の不在。臨床心理学者E. H. エリクソンは、その心理学において「相関性」あるいは「相対性=関係性」(relativity)を強調しているという(西平 直, 1993, 21)。それは、「事実はその事実を得るに至ったものの見方に依存する」という問題である。あるいは、「唯一の『客観的事実』を保証するような特権的・絶対的な基準系なるものは、もはやどこにも存在しない」(同上書, 22)という問題である。あるいは、日本における文芸教育の指導者西郷竹彦は、「認識も、表現も、すべては、主観(視点)と客観(対

象)の相関関係にもとづく」という「関係認識」を理論化している(西郷竹彦, 1996, 12)。主体と客体の相関性は、自然科学においても人間科学においても、いまさら強調するまでも無く、自明のことである、と言えるかもしれない。例えば、物理学における周知の観測問題を想起すればよい。しかし、一方に、「自然科学としての心理学」の支配を受けてきた心理学研究においては、私の印象では、「主体から独立な客観性」を素朴に求める傾向が、いわゆる「客観性」を求める場合に、いまだに強く残っていて、ときおり、思わぬところでこの傾向が姿を現して私達を驚かすことがある。しかし、心理学においては、「主体から独立な客観性」など、少なくとも、容易に達成できるものでは決してない、ということ洞察することは容易である。例えば、二人称の心理学、「我による『汝の心理学』」においては、我が誰であるかによって、我に汝が「開示する」(disclose)心のありようには大きな差異が生じる(ジュラード, S.M. 1974; 加賀乙彦, 1991)。従って、開示された「汝」の心のありようは、その開示を受け止めた「我」が誰であるかということ抜きにして、確かな認識とすることは出来ないのである。まして、仮に、汝が「開示する」心のありようが、何らかの意味で同じであると主張できるような場合がある仮定したとしても、さらに、その心のありようを、どのように「読み」認識し、どのように「書き」表現するかは、「我が誰であるか」によって必ず差異を生じる。そして、さらに、同様に、何らかの意味で、同じであると主張できるような認識表現でも、それを表現した認識主体が「誰であったか」によって、その表現の理解を変えるであろう。例えば、男性による表現か女性による表現かによって、その特定の表現の意味が変わることがある。そして、さらに、その表現を理解する主体が「誰であるか」によっても、何をどのように理解するか、差異が生まれる。このことは、実は、「二人称心理学」に限らず、「一人称心理学」、「三人称心理学」の何れにおいても、基本的には、同様なのである。こうしてみると、認識と表現とその授受における「主体と客体の相関性」は、研究主体である我に「心を許したり許さなかったり、開示したりしなかったりする」主体としての人間を、「研究の対象」として研究する心理学においては、特に顕著に表れる、と言わなくてはならない。そのことに明示的に言及し、そのことを強調するとき、第一の「我性」の強調、また、第五の「心的距離の多様性」の明示化と相関して、第六の「主体と客体の相関性」は、三心理学の相互補完性を指し示さないでは居ないのである。

七) 第七に、心理学の人称性について、現実と虚構それぞれにおける人称性との関連を明示的に視野に入れることを怠っていた怠慢。心理学は、「科学」として現実を描くことをその役割として自ら引き受ける場合、一つの現実に対して変更しうる視点の変化は、虚構の場合に比べて、極めて限られている。例えば、一地点に立って、「客観的に」知覚的に観察する場合を考えてみれば、そのことは、自明であろう。そこから見えない事物現象は、見えないのである。しかし、虚構においては、例えば芸術作品としての小説の場合、夏目漱石『文

学論』(1966/1907)の豊かな考察が示しているように、そこで作者がとりうる視点の変化は多種多様でありえて、視点の移動は自由自在である。例えば、漱石は『我輩は猫である』において、カフカは『変身』において、あるいは、ウルフは『フラッシュ:或る伝記』において、虚構において作者が取りうる視点の自由自在さを、鮮やかに例示している。ここで、三心理学が、「客観的な科学である」との主張から、虚構における視点変更の自由さとそこから生まれる人間洞察の広さと深さに、仮にもし何も学ばないとしたら、それは余りにも視野が狭く、愚かであるとしたら、私には思えない。例えば、土居健郎の『漱石と精神医学』に見られるように、虚構としての文学芸術から心理学が学ぶべきことは非常に大きい、と私には思われる。心理学が、自然科学にせよ人間科学にせよ、科学であることを主張するとするならば、現実の研究者が現実の人間として、人称性と視点性の制約を受けつつ、その制約を現実的に忠実に認識し表現し理解しなくてはならないはずである。しかし、人間の行動と経験についての理解において、表面的な解釈を幾分でも超えようと努めるとき、心理学研究者は具体的な人間心理について多種多様な解釈を必要とすることになる。そして、無自覚に自らの固定した視点に束縛された浅薄で皮相な一視点的解釈では、どうしても済ませることが出来なくなり、多視点的な解釈を必須とするようになる。このとき、それにもかかわらず、現実の心理学が守るべき人称性による視点の厳しい制約とその意味、および、虚構における人称性と視点の自由奔放さの積極的な意味、それら相互の関係を明らかにし、「人間科学としての心理学」が、「心理学」としての自己同一性を保持しつつも、虚構から学べることは何か、学ぶべきことは何か、を明らかにして行かなければならない。さらに、例えば、川端柳太郎(1978)が文学的時間論として展開している、小説における多種多様な「虚構の時間」からも、心理学が学べることは広く深いに違いない。三心理学の心理学は、そのような明確な基礎付けをもって、自らを豊かにして行く道を実現して行かなければならない。例えば、現象学的心理学で言う豊かな「想像自由変更」は、文学芸術から学ばなければならないであろう。心理学は文学芸術の「想像力」から多くを学ぶべきである、と私は考えている(Yoshida, 2001)。未開拓で巨大な課題が、ここに潜んでいる。

八) 第八に、三つの心理学の本質的な相互内属性が、明示的に解明されておらず、したがって、配慮が不足していた怠慢。ここで言う「三つの心理学の本質的な相互内属性」とは、三心理学がそれぞれ自身の中で自己完結しているのではなくて、実は、相互包含の可能性を秘めている、ということを示している。例えば、「我による『私の心理学』」を創造する心理学研究者が、他者によって創造された「我による『誰彼の心理学』」あるいは「我による『汝の心理学』」を学び、それを理解するとき、それを理解する我自身を理解することもまた深まり変化し、「我による『私の心理学』」の一部を占めることになる。そのことは、他の二つの心理学についても同様である。そして、さらに、「『説明する』と『理解する』」について

も、実は、同様なのである。つまり、「『説明する』を『理解する』』と、「『理解する』を『説明する』』とを、もし、それらの現実性と可能性に即して実現するならば、その間にも、相互包含と相互内属が起こる。こうして、三つの心理学の未だ主題化されていない相互内属性が明示化されて行くならば、それらのどれから出発しても、心理学が人間による人間の研究である限り、三者の「多様性を通じての統合性」に到達せざるを得ないはずなのである。このことは、人間が世界で孤立した存在者ではなくて、「世界内存在」(ハイデガー) していることから帰結される。このことは、また、個人のレベルで言えば、我は、「他者のような我」であり、他者は「我のような他者」であることから、また、そのようにして、我々は、我を捉え、他者を捉える、ということによって基礎付けられている。このことを導きとして、三心理学の相互内属性が露わになってくる。

九) 第九に、そのことによる、三つの心理学の統合的な組織化と体系化に向けた道筋が主題化されておらず、見えて来ていない、という不十分さ。上記の八) の三心理学の相互内属性が確信されるならば、たとえその具体的な筋道は明瞭には眼前に展開される展望としては未だ見えて来ないとしても、それはちょうど、登るべき高峰への多種多様な道筋の可能性があたり霧に覆われているように現在は見えないと同様である。登るべき高峰は、霧に覆われた多種多様な道筋のその先にある目標として見えるようになるであろう。そして、多種多様な道筋に導く最近接の登山口の意味も、高峰へと導くという意味を次第に帯びようになるであろう。心理学が目指すべき「高峰」が主題化も解明もされておらず、目指す目標としても自覚化されていない状態では、三心理学の営みは、目当てのないただの散歩か彷徨か、入り組んだ迷路探索、謎解きの「お遊び」に過ぎないということにもなりかねない。心理学の歴史を辿ると、全体として、そのような印象を受けることさえもある。人間心理学には、目指すべき「高峰」が在る、と私は考える。それは、先取りして言うならば、三心理学の連続性と相互内属性を基礎にした、三心理学の「多様性を通しての統合性」をもつ「解放倫理実現」の学問として構造化され意味化された心理学である。このことを、私には次第に確信するようになってきた。このことの自覚と明示化は、心理学全体にとって、緊急の課題であろう、と私は考える。

十) 第十に、三つの心理学の連続性と相互内属性を基盤に置く、目指すべき「高峰」としての、一つの統合的な心理学の可能性が視野に入ってきて、多種多様な心理学の研究者たちの間で相互に共有されることになれば、それぞれの心理学の具体的な「研究方法」に関しても、統合が実現する以前における三心理学の間での相互交流として、統合に向う方向への動きが可能となってくる、ということの自覚の不足。心理学における「研究方法」は、多種多様な心理学を特徴づける「ものの見方」(a point of view) と「素材内容」(subject matter) のうち、「ものの見方」から導かれ、素材内容を決定する。その意味で、心理学研究においては、研

究方法は、ことに重要な位置を占める。三心理学は、「研究方法」においては、比較的と言って、相互に判然と区別される状態が歴史的に続いてきている。典型的には、「我＝我・心理学」は内省、「我＝汝・心理学」は対話・面接、「我＝誰彼・心理学」は実験と観察など、という具合にである。しかし、これまでの議論によって指摘された連続性と相互内属性に基礎づけられた統合的心理学への道が相互に承認されるならば、この「研究方法」に関する棲み分けにも、変化が起こるはずである。それぞれにおける個々の方法の意味と意義は異なるとしても、多種多様な研究方法が、三つの心理学のいずれにおいても試され、その意味への理解の深化と豊富化が起こるはずである。この点については、別の機会に、詳論の展開を試みたい。

十一) 第十一に、三つの心理学の統合において、中核となるべき心理学はどれかということについての曖昧さ。では、三心理学の統合化において、三心理学のうちのどれかがその中心となるべきである、ということがあるだろうか。それとも、三つともが全く対等の位置づけで統合されるべきである、ということであるのだろうか。これは、心理学の存在理由がどこにあると考えるかによって異なってくる。例えば、「因果分析科学」であれば、もっとも「科学的である」とされる「我＝誰彼・心理学」が中核を占めるべきだ、ということになるかもしれない。実際、ある時期までの米国では、臨床心理家の卵たちも、大学院の心理学専攻において、実験計画法などの高度な統計学の学習をしないうちは、Ph. D. を取得することすらできなかった。「実証的研究」は統計的処理と無縁ではありえなかった。「目的達成技術」であれば、あるいは、「我＝誰彼・心理学」に加えて、「我＝汝・心理学」も、統合化の中核を占めよ、ということになるかもしれない。臨床的な「技術」が、「科学」に加わるであろう。「人間理解教養」であれば、「我＝我・心理学」がその中核を占めるだろう。悟りの瞑想も、そこに、方法として姿を現すだろう。しかし、「解放倫理実現」であるならば、「我＝汝・心理学」が中核を占めるべきだ、ということになるように、私には考えられる。それは、さらに言えば、「我による『我と汝の心理学』」こそが、心理学の中核となって、心理学全体を統合化して行くべきだ、という構想とも成る。心理学全体は、単なる学問的興味から「因果分析科学」として「真理のための真理」の「研究のための研究」として営まれるという、趣味的で自閉的な学問に留まることは出来ない、と私は考える。また、任意の、所与の目的達成のための、つまり学問として何に尽くそうとするのかその存在理由については盲目的で、他所から与えられた任意の目的に対して奉仕する「目的達成技術」に留まるということではできなくなる、と私は考える。それは、かつて、物理学において、核物理学による「因果分析」を基盤に、原子力工学による「目的達成」の技術の成功によって為し遂げられた、戦争における人間大量殺戮兵器「原子爆弾」の発明と、それによる戦争目的達成の盲目的な大成功が、倫理的道徳的な中核を欠いていたために、結果的に、人類にもたらすことになった

惨害と不幸を肯定できないのと同様である。物理学者アインシュタインやオッペンハイマーなどの苦悩を思い出す。「因果分析科学」は、説明と予測を求める。「目的達成技術」は予測と制御を求める。その意味で、如何にも西欧的な科学と技術である。「人間理解教養」には、東洋的な覚りを求める趣を私は感じる。仏教で言えば、小乗仏教であろうか。そして、「解放倫理実現」は、倫理的な人間関係の探究を通して共生を求める。仏教で言えば、大乘仏教であろうか。さてそこで、心理学は、「我による『我と汝の心理学』」を中核として、人間の在るべき姿と、それを実現するための叡智・智恵・知識・技術・教養を育むべく、その学問の倫理的な存在理由を明瞭化できる、真に人間的な学問へと発展していくべきであろう。現在の段階では、これは、私の夢に近い個人的な願いに過ぎないかもしれない。ここでは、問題の所在を示唆するのみに留める。

十二) 第十二に、これまで、三つの心理学を、我、汝、誰彼 (I, You, S/he = Anybody) の関連によって、定式化してきたが、その拡大あるいは延長の可能性の、明示的自覚の欠如。ここで言う拡大あるいは延長とは、我の拡大としての我々 (We)、汝の拡大としての汝ら (複数の You)、誰彼の拡大としての彼ら (They)、そして、誰彼の延長としての「それ」あるいは「それら」(ItあるいはThey) を指す。研究の主体として、個人としての「我」ではなく、集団としての「我々」が、研究の対象として、個人としての「汝」あるいは「誰彼」でなく、集団としての「汝ら」あるいは「彼ら」(They) も、考えられる。また、人間を「それ」として物化して捉える科学的研究の可能性もある。さらに、「ロボット工学」における「心理学」さえ考えられるかもしれない。ロボットと人間、ロボットとロボットの戦争さえ、既に、現実性を帯びてきている現代である。「神経工学」による脳とコンピューターの直接的結合は、「心理学」の可能性を新しく急速に拡大してきている、という。また、心理学研究の主体の集団化と、対象の拡大と延長は時代の趨勢でもあり、視野に収めて、その意味するところを慎重かつ徹底して考えておくべきであろう。しかし、本論は、多種多様な心理学の統合へ向けての準備としての基礎的考察であり、また、筆者自身の能力の限界もあり、さらに、現在の段階での緊急性は高くないということもある。ここでは、この拡大あるいは延長の可能性のもつ意味と意義についての展開は控え、問題の指摘に留める。

十三) 第十三に、心理学全体の将来像の自覚的明示化とそれから生まれる三つの心理学それぞれの意味と意義の自覚化と明示化の欠落。心理学という学問全体は、人類の歴史における人間心理の研究におけるあらゆる多種多様な可能性を包含し、まさしく「多様性を通じての統一性」(Unity through Diversity) を実現する学問として、基本的には、三つの心理学の何れをも活かして、多様性を体現する三つの心理学を統合する統一性として、将来に向けて構築されて行くべきである、という洞察が、明示的には自覚されていなかった。さらにまた、逆に、その統合的な将来像から遡行して、これからの三つの心理学の、統合以前の段階にお

いて、それぞれが担うべきそれぞれの意味と意義も定まってくる。そして、三つの心理学から構成される全体像の構造も、そこから定まってくる必然性をもっている。それは、全体と部分の関係における循環的論理から帰結される必然性である。しかし、三つの心理学を統合した心理学全体という発想が欠落したところでは、心理学全体の一部にすぎないはずの一つの心理学、それもそのなかの一変種の狭い世界に安住している心理学者が存在しうる。そうした心理学者にとっては、ここで言う「部分」がいわば「全体」そのものなのであって、そのため、その部分が全体に対してどのような意味と意義をもち、逆に、より大きな全体からその部分がどのように制約されつつ、全体に対してどのように貢献しうるか、といった問題意識すらもつことが出来ない。まさに、「井の中の蛙、大海を知らず」の自閉的な状態に安住することになる。長い時間を掛けて、この状態に心理学研究者たちを追い込んで安住させてきたのは、哲学からの独立を目指して創設された「自然科学としての心理学」における哲学放棄と心理学内部でも見られる専門分化による「たこつぼ」化（丸山真男）の伝統である。しかし、既に指摘したとおり、そして、皮肉なことに、この伝統の創始者たちは、例えば、ヴントにしても、テイッチェナーにしても、ギリシャ以来の哲学とともに当時の哲学の諸潮流について、また、人文学全体についての教養が極めて豊かだったのである。つまり、心理学全体を視野に入れつつ、彼らの「部分」を構想していたのである。これからの心理学の将来は、そしてさらに、その全体は、ある時代と社会において偶然に流行している主流哲学によって支配されるのではなく、——例えば、視野の狭い実証主義哲学もその一例であり、さらにその亜流である、ブリッジマンの操作主義哲学なども、さらにその悪例の典型である——哲学と歴史学、文学、芸術学などの人文学の長い歴史から選び抜かれた最良のものを踏まえて、構想されるべきであろう。現在の心理学には、その方向性の芽がやっと出てきていると言えるのではないだろうか。そうした大きな構想に位置づけられた心理学全体の姿が思い描かれておれば、たとえ、一人ひとりの研究者としては、狭い範囲の小さな問題を緻密に専門的に研究していても、その研究の意味づけについては、心理学全体の中での位置づけと意味づけが可能となり、「井の中」として生きつつも、そこから広い世界の「大海」に発信しまたそこから受信することが可能となるであろう。心理学者たちの視野も拡大し、柔軟な「教養」も、身につくことになるだろう。そのようにして、それぞれの心理学者が、心理学全体にそれぞれの仕方でも貢献することができるようになるであろう。今日、心理学界でも「心理学の哲学」（例えば、渡辺恒夫ほか編、2002）が注目され始めているらしいということは、その意味で、同慶の至りである。私が最近遭遇した、渡邊二郎『歴史の哲学』講談社学術文庫は、歴史哲学に関する著書であるが、心理学の研究者にとって、「心理学の哲学」を考える上で、極めて示唆に富むものである、との深い感銘を受けた。

十四) 第十四に、三つの心理学それぞれのうちにも、相互に異なる存在理由をもつ多様な

心理学の可能性があることの自覚化と明示化の欠落。三つの心理学それぞれに、その存在理由、あるいは、成就しようとする目的動機が異なる心理学が存在しうる。例えば、先に提示した四種の学問、すなわち、「因果分析科学」、「目的達成技術」、「人間理解教養」、「解放倫理実現」の区別と分類（あるいは類別）を三心理学の第一次元に、新たな第二の次元として加えることができる。そこで、論理的には、二次元平面に、 $3 \times 4 = 12$ 種類の「心理学」を区別することが出来ることになる。目的動機の種類についての明示化以前の原定式化においては、このような区別の自覚も定式化も、当然のことながら、出来ていなかった。このように区別をしてみて、この区別と分類に従って考えてみる。すると、これまた当然のことであるが、例えば、今日の主流である「我＝誰彼・心理学」（三人称の心理学）も、目的動機の点では、実は、その内部で、四種の心理学が可能であることが見えてくる。言い換えれば、「我＝誰彼・心理学」（三人称の心理学）であることが、必ずしも「因果分析科学」とならなければならない必然性をもたない、ということに気づかされるのである。それは、言うまでも無く、「目的達成技術」として展開する可能性をもっている。臨床心理学の分野における、スキナー心理学の発展としての行動療法は、単なる「因果分析科学」であることに留まらず、限定された意味においては「目的達成技術」として、成立している。あるいは、多くのいわゆる「応用心理学」の研究と技術は、まさに、これに該当するであろう。しかし、そのみに留まらず、そうした種類の「因果分析科学」も「目的達成技術」も、それを熟知することは、人間をある限定され視点から把握した場合にどのように映るかということを理解することに繋がり、「人間理解教養」の一部の目的動機を満たすであろうし、その知見が、現実に、これまた、限定された範囲で、その範囲の限定を十分に意識し自覚している限りにおいて、「解放倫理実現」の目的動機を満たす課題の一端を担いうることは、否定できないであろう。むしろ、「因果分析科学」や「目的達成技術」を、「人間理解教養」や「解放倫理実現」の視点から、新たな積極的意味づけをすることが求められているように感じられる。それぞれの優れた点を相互に認め合うという方向性が基盤となるなら、そのように、視野を拡大して行くことが、当然、起こらなければならないはずだ、と考えられるのである。以上のことは、三人称の心理学に限らず、二人称心理学、一人称心理学においても、基本的に、全く同様である。しかし、そうした、視野の拡大は、従来、ともすれば見られた、相互蔑視の長い歴史があるだけに、容易ではないのかもしれない。とはいえ、以下の第十六で述べる、「心理学者の心理学」が深化するならば、また、その深化は、このことを可能にすることによって、その存在理由を示すことになるはずであろう、とも考えられるのである。

十五) 第十五に、異種心理学間の相互遷移の可能性と、遷移それぞれの可能性実現の為の展開可能性の自覚化と明示化、定式化の欠落。仮に、十四) で示された ($3 \times 4 = 12$) の区別と分類と類別を認めたとする。と、それら12種類心理学間の相互遷移の可能性と、遷移

それぞれの可能性実現の為の展開可能性, それぞれの種類から出発して次第に統合された心理学への発展的統一の可能性, などの問題が発生する。それぞれの移行には, それぞれの問題, 障害と困難, 解決すべき問題, が包含されている。しかし, 原定式化では, 上記の仕方での異種心理学の区別も分類も未知であった以上, 当然のことであるが, そもそもそのような諸問題そのものが自覚化も明示化も定式化も出来ていなかった。以上の問題は, これまた, 戯れに, 計算するならば, 12個から2個を選んで並べる順列の数「132通り」もの移行の可能性があり, それら総ての移行に共通する問題ばかりでなく, その一つ一つの移行に独自の問題が秘められているに相違ない。ここでは, 共通の問題としては, A. Schutz (1964, a, b.) が解明した「よそ者」(The Stranger) と「帰郷者」(The Homecomer) の問題に類似した, 移行者が経験する移行者体験の諸問題が予期されることを指摘しておこう。それと同時に, 総ての移行が全く同じ重要性を持つのではなく, 心理学全体としては, ある移行の筋道が, 心理学の統合への道にとって特に大きな重要性をもつ, というようになっているであろうということも, 既に予期される。例えば, B. F. Skinnerに傾倒している心理学者が, E. Husserlに傾倒するに至る道も, その逆も, そして, その道すがらにおけるその心理学者の心の旅路も, 心理学的には, 極めて重要であり, 興味深いものであろう。ここで, 例えば, オランダの現象学的心理学者ポイテンディク (F. J. J. Buytendijk) の弟子だった Linshoten は, 現象学的心理学から行動主義心理学への移行を為した珍しい人物として, 現象学的心理学者の間では, よく知られている。その心の旅路の軌跡は, 以上のような「移行問題」の心理学的研究において, 注目すべき研究対象となりうるであろう。この視点からは, この領域には, 多数の重要課題が, 優れた心理学研究者による解明を待って, 眠っている。

十六) 第十六に, 以上のような, 多種多様な心理学の「多様性を通じての統一性」の構想を, それぞれの心理学が「地域性」「田舎性」から脱出し, 「全国性」「世界性」「人類性」へと結集することへ誘う展望として活かす配慮の欠落。私が, 学問の世界で, 心理学が帯びている「田舎くささ」の指摘に初めて接したのは, ルビンシュテインの著作『存在と意識』(1960, 上, 28ページ)においてであった。そして, いま, 私自身も, 心理学の「田舎性」を深く実感するのである。それぞれの心理学が, それぞれの視野の狭さゆえに安らっている現在の「地域性」「田舎性」から脱出し, いわば相互の特色を一層活かすことになる「全国性」「世界性」「人類性」へと結集するようと, 誘って行く道は, どこにあるのであろうか。もちろん, ここには, 部族を統合する全国統一や, 諸国家を統合する世界国家の構想にも似て, 現実には, 容易に実現できるものではないことは自明である。さらに, 諸部族の全国統一のように, 権力, 武力, 政治力などによって, それを達成することは出来ないし, また, そのようにして, 達成されるべきものでもない。とすると, あくまでも, 一人一人の心理学研究者の, 心理学全体の在り方に対する知見の啓発と, それに誘発されて生じる「自発性」に待つしかないで

あろう。また、心理学研究者の間の活発な知見の交換と交流に待つしかないであろう。しかし、そうした統一へ向かう理念さえもそもそも全く欠いていては、そして、一人一人の心理学者が、心理学それぞれの地方の「田舎性」に満足している現状では、統一の実現の可能性を論じ合う遙か以前の混沌状態にあるということになる。現在の心理学の状態は、まさに、狭い視野の部族と部族が群雄割拠し争い合う戦国時代、あるいは、何の交流も無く広い世界に無知なままに互いに離れて孤立したまま並存している未開時代、同時にそのいずれにも似た混沌状況にある、と言ってさえよいであろう。それぞれの部族が、全国统一あるいは世界統一の理念に向けて、自らの役割を自覚しつつ、調和的な「競争と協力」を発揮できるようになるためには、次第に、その動きを導き「高峰」を指し示す「統合への理念」を理論的に磨き上げて研ぎ澄ませて行くこと、そして、それを次第に広く周知させ、それが総ての部族によって共有されるに至り、上記の「自発性」が生まれること、そのことが求められている、と私は考える。確かに、道は未だまだ遙かに遠い。が、しかし遠い道そのものは既に見えつつある。そう私は考える。

十七) 第十七に、以上のような多種多様な心理学の統一化の構想を実現するためには、ある段階においては、多種多様な心理学を研究に従事している「多種多様な心理学研究者を理解し説明する心理学」を実現し、心理学者たちとの相互理解を深める必要がある。その必要性の明示化が欠落していた。心理学の「我性」が心理学研究の本質的な特性であるとするれば、多種多様な「我」によって独創的に創造された、あるいは、模倣的に生産された、多種多様な心理学とその総体を理解するには、その創造者あるいは生産者たちである多種多様な心理学研究者の「生活世界」(Life-world, and/or, Lived-world)を研究し理解することが必要となってくるであろう。この点は、既に、別稿(吉田章宏, 1990, 151-2)で、指摘しておいたところである。もっとも、その研究の「我性」もまた忘れてはならない。すると、心理学研究者の研究は、無限遡行を誘うことにもなりかねず、研究全体として自家中毒をも招きかねない。が、しかし、そうした研究の不在は、現在の心理学研究の盲点なのである。さらに、三心理学のそれぞれが、それぞれの仕方で、貢献しうる研究課題でもある。多種多様な心理学研究者の「生活世界」の解明は、心理学研究者の自己反省を促し、三つの心理学の相互交流と、研究の重層化と深化とに、貢献することであろう。心理学研究者の心理学的研究は、以上のような意味で、三つの心理学の何れにとっても、重要な意味をもつ研究であり、しかも、心理学研究の本道から少しも逸れていない研究である。この研究は、発展すれば、心理学者の発達心理、認識心理、精神病理、社会心理などの研究へと深化するであろう。また、心理学史の研究にも繋がってくるであろう。さらには、知識社会学の研究、例えば、Thomas Kuhnの「科学革命の構造」のような研究にも繋がってくるであろう。そして、そうした研究が、多種多様な心理学の「多様性を通じての統一性」による統合と組織化と体系化を促し

導く力となることが期待される。

以上、三心理学の原定式化の不十分さを明示化し、それを契機に、三者の「多様性を通じての統合性」による統合への道を探ることに努めてみた。問題は以上で尽くされては居ないであろう。道は遥かに遠い。しかし、目指す「高峰」は、既に、遥か彼方に見えて来ており、そこに到る道を覆っていた霧もやや晴れて来ているとの思いを、私は、抱くことができる。この展望は、例えば、Hall, C. S., & G. Lindzey (1957, 553) における、「理論的帝国主義」(theoretical imperialism) の排除と「自由企業」の称揚を唱える、いわば自由放任主義の唱道を一歩超えるものである、と私は考える。また、同様に、現代の「心理学科」は「心理学的諸研究の学科」と呼ばれるべきであるとする Sigmund Koch (1999, 134-135) の悲観的とも響く見方よりも、一段と明るく積極的な見方となっている、と信じたい。心理学の「多様性を通じての統一性」は、三つの心理学の統合によって、たとえ遠い将来にせよ、実現されなければならないし、また、そのようにして、実現されるであろう、という「ある一つのより大きな理論的構造」(吉田章宏, 2004a, 219) を備えた展望となりうる、と信じる事が出来るからである。三つの心理学の原定式化に加えて、以上の解明の試みを経て、改めて三つの心理学の定式化に努め、本稿をひとまず終えることにしたい。原定式化は、三つの心理学の内的地平のみに焦点を当てていたのに対して、ここで得られる定式化は、結果として、それらの外的地平にも、目を配るものとなった模様である。そのことをもって、とりあえず、私は満足することにしたい。以上の原定式化の検討は、思いもかけず、予定していた紙幅を遥かに超えてしまうことになった。当初本稿で執筆するつもりだった、三心理学の人称性に必然的に伴うと広く考えられてきている研究方法の制約の克服と撤廃に向けた解明と考察は、いずれ稿を改めて論ずることにしたい。

三心理学の新定式化: まとめと結びに代えて

そもそものA稿における原定式化は、単純に以下のようなものであった。

「私は、心理学の在り方に、少なくとも論理的な可能性として、人称態による『三つの心理学』(『我による「私の心理学」』、『我による「汝の心理学」』、および、『我による「彼(誰彼)の心理学」』)の区別を考えなくてはならない、と確信するに至った。」(A稿, 55ページ)。

さて、A稿からE稿、さらに本F稿までの省察を踏まえて、三心理学の新しい定式化とそれをめぐる省察のまとめを試みれば、以下ようになる。

心理学は、可能性としてもまた現実性としても、混沌と呼ぶほかないほどまでに、多種多様である。しかし、その多種多様性の中にも、共通して成立する第一の原理がある。それは、

『総ての心理学の研究主体は「我」である』という、心理学の「我性」の原理である。さらに、この第一の原理のもとで、混沌にある多種多様な心理学に「多様性を通しての統一性」としての秩序をもたらす見通しを立てるための第二の原理として、『心理学には、論理的可能性としての「三つの心理学」の原型がある』という三心理学の原理を提唱する。『三つの心理学』の第一は、『我による<私の心理学>』、すなわち、『研究主体である我が、自分自身である<我>を研究客体・対象として研究する心理学』である。その第二は、『我による<君の心理学>』、すなわち、『研究主体である我が、我にとっての<君>を研究客体・対象として研究する心理学』である。その第三は、『我による<誰彼の心理学>』、すなわち、『研究主体である我が、我にとっては任意の他者を、すなわち<誰彼>を、研究客体・対象として研究する心理学』である。三者のうち、第一のものは、『私の心理学』とか、『第一人称の心理学』と呼ばれ、第二のものは、『君の心理学』あるいは『第二人称の心理学』、第三のものは、『誰彼の心理学』あるいは『第三人称の心理学』と呼ばれる。第二のものと第三のものを合わせて、第一の『我による<私の心理学>』から区別して、『我による<他者の心理学>』と性格づけ、『他者の心理学』とも呼ぶ。三つの心理学の間には相互に、同時に、差異性と同一性が存する。言いかえれば、相互に不連続化できると同時に連続化もできる。まず、不連続性が根底にあることが確認される。我にとって、我と君、我と誰彼、君と誰彼は、同一視はできない。しかし、そうした根源的な不連続性にもかかわらず、多種多様な連続化が可能である。研究の語りや「書く」際における、また、研究の語りや「読む」際における、人称代名詞の相互互換可能性により、三者は、少なくとも表現の「書き」と「読み」の両方において、表面上は、互換可能である。また、研究主体である我が、「我、君、誰彼」への「心理的距離」を自由自在に変化させることができるという限りにおいて、三者は、相互に、限りなく近くなることも、限りなく遠くなることも、できる。以上のような、書き方、読み方、心理的距離の取り方における変化の総てが働く活動過程がある。それは、心理学研究の「生産、流通、消費」の過程であり、そこでは、三心理学は、相互に重なり合い交じり合う。それだけではない、心理学的認識とその表現の授受においては、認識と表現の主体と客体には相関性が認められ、その相関性によって、認識も表現も、多彩に変化する。また、現実と区別される虚構においては、上記の変化、これを「視点の変化」と名づけるならば、自由自在な「視点の変化」が認められる。そのような自由自在な「視点の変化」については、現実を研究対象とする心理学も、その方法としての「想像自由変更」を内容豊かにするために、虚構の「視点の変化」の実践と研究に学ぶことが求められる（例えば、『小説の時間』における時間の解明）。そこから、三心理学の統合への道が開かれるであろう。さらに、三心理学には、「私の内なる他者」、「他者の内なる我」という相互内属性に対応して、相互内属性がある。ここにもまた、三心理学の統合への道を開く可能性が潜んでいる。この統合において

は、「我による<汝の心理学>」、あるいは、「我による<我と汝の心理学>」が中核となるべきである、というのが筆者の考えである。その理由は、心理学は人間のあるべき姿の可能性と現実性を探究する学問として、「解放倫理実現」に向けて、「人間科学としての心理学」へと統合されて行くべきである、と筆者は考えるからである。以上では、「我、汝、誰彼 (I, You, S/he = Anybody)」の三心理学を基礎に考えてきたが、その拡大あるいは延長として、「我々、汝ら、彼ら、それ/それら (We, You, They, It/They)」による定式化の可能性も残されている。また、遠未来における、心理学統合化の全体的将来像がいわば「高峰」として姿を現せば、それに対応して、現在は未だ分裂状態にある三心理学のそれぞれが統合への過程において担うべきそれぞれの意味と意義に相応しい現在像と近未来像も姿が示されるであろう。そして、心理学者たちの視野も拡大し、柔軟な「教養」も、身につくことになるだろう。三心理学のそれぞれに、「因果分析科学」、「目的達成技術」、「人間理解教養」、「解放倫理実現」の類別を重ねることができる。その結果、 $3 \times 4 = 12$ の種類心理学を想定でき、その相互間の遷移を通して、心理学統合への道筋を、より具体的に考えることが可能となる。そのことにより、心理学全体の「田舎性」「地方性」を克服し「世界性」「人類性」へと向かう可能性が生まれる。その過程で、「多種多様な心理学研究者を研究対象とする心理学」がもし実現されるならば、それは、多種多様な心理学者間の相互理解を促し、多種多様な心理学の「多様性を通じての統一化」に貢献することになるであろう。心理学において望まれている「多様性を通じての統一性」は、三つの心理学の統合によって、たとえ遠い将来にせよ、実現されなければならないし、また、そのようにして、実現されるであろう。

以上のような構想は、三つの心理学という単純かつ根源的な区別の明確化によって、可能となったのだ、と筆者は主張したい。ひとまず、以上をもって、本F稿の結びに代える。

参考文献

- ウルフ、ヴァージニア (1993/1933) 出淵敬子訳『フラッシュ:或る伝記』みすず書房
 ヴィゴツキー (1962/1934) 柴田義松訳『思考と言語』上下、明治図書
 荻野恒一 (1964)『精神病理学入門』誠信書房
 川端柳太郎 (1978)『小説と時間』朝日新聞社
 加賀乙彦 (1991)「私の文学と宗教」『人間性心理学研究』第9号 日本人間性心理学会, 21-35
 カフカ、F. (1952/1915) 高橋義孝訳『変身』新潮文庫
 ターン、T. (1971/1962) 中山茂訳『科学革命の構造』、みすず書房
 西郷竹彦 (1996)『西郷竹彦文芸・教育全集2 関係認識・変革の教育』恒文社
 ジュラード、S.M. (1974) 岡堂哲雄訳『透明なる自己』誠信書房
 土居健郎 (2000)『文学と精神医学』土居健郎選集7 岩波書店
 夏目漱石 (1966/1907)『文学論』漱石全集 第九巻 岩波書店
 西平 直 (1993)『エリクソンの人間学』東京大学出版会
 フッサール、E. (1975/1939) 長谷川宏訳『経験と判断』河出書房新社
 吉田章宏 (1984)「発達理論」鹿取廣人編『現代基礎心理学10』東京大学出版会 252-276

- 吉田章宏 (1990) 『『教育心理学』に期待する一つの遠未来像: 僻地にある『迷える子羊』から見たその眺望』教育心理学年報 第29集 別冊 142-153
- 吉田章宏 (2002) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の人称性: 我, 汝, 誰彼の心理学」淑徳大学大学院研究科研究紀要 第9号 43-56 (A稿)
- 吉田章宏 (2003a) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の多種多様性について」淑徳大学学部研究紀要 第37号 149-165 (B稿)
- 吉田章宏 (2003b) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 三心理学の不連続化と連続化の道」淑徳大学大学院研究科研究紀要 第10号 1-17 (C稿)
- 吉田章宏 (2004a) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 多種多様な心理学の統合の可能性」淑徳大学学部研究紀要 第38号 219-240 (D稿)
- 吉田章宏 (2004b) 「匿名化」を選ぶの構造 淑徳心理臨床研究 vol.1. 11-24
- 吉田章宏 (2005a) 「心理学研究方法論をめぐる省察: 多種多様な心理学の統合は何故必要か」淑徳大学社会学部研究紀要 第39号 76-95 (E稿)
- 吉田章宏 (2005b) 「匿名性から虚構性へ」淑徳心理臨床研究 vol.2. 1-12
- ルビンシュテイン, エス・エリ (1960/1957) 寺沢恒信訳『存在と意識』上 青木書店
- 渡邊二郎 (1999) 『歴史の哲学: 現代の思想的状況』講談社学術文庫
- 渡邊恒夫・村田純一・高橋滯子編 (2002) 『心理学の哲学』北大路書房
- Hall, C. S., & G. Lindzey (1957) *Theories of Personality* John Wiley & Sons.
- Kaufmann, W. (1970) *I and Thou Martin Buber: A New Translation with a Prologue "I and You" and Notes*. Charles Scribner's Sons.
- Koch, Sigmund (1999) *Psychology in Human Context*. The University of Chicago
- Kunz, George (1998) *The Paradox of Power and Weakness: Levinas and an Alternative Paradigm for Psychology*, SUNY
- Schutz, Alfred (1964a) *The Stranger Collected Papers II Studies in Social Theories*, Martinus Nijhoff 91-105
- Schutz, Alfred (1964b) *The Homecomer Collected Papers II Studies in Social Theories*, Martinus Nijhoff 106-119
- Yoshida, Akihiro (2001) My Life in Psychology: Making a Place for Fiction in a World of Science *Journal of Phenomenological Psychology* Vol.32. No.2. 188-202

A Meditation on Research Methodology of Psychology: Reconsidering the three Psychologies toward “Unity through Diversity” in Psychology

Akihiro YOSHIDA, Ph. D.

Contemporary Psychology as a discipline, if it has ever been “a” discipline, is in a state of chaos consisting of diverse opposing psychologies without any single overall principle to integrate them to bring an order to the chaos. This view of the contemporary psychology is on my own responsibility, to which, however, Sigmund Koch (1999) would be in good agreement. This article is a modest attempt to suggest “a larger theoretical structure” (Becker, E., 1973, xi) which will be capable of including, and possibly integrating, all opposing views existing in the diversity of psychologies.

In a preceding article (Yoshida, 2002), the three psychologies were formulated to be distinguished: I-, You- and S/he/Anybody- Psychologies. The following four articles (Yoshida, 2003a, 2003b, 2004a, 2005a) have considered the implications of the diversity of existing psychologies and the future possibilities of their integration.

The present article reconsidered the original formulation of the three psychologies and reformulated it according to both its inner and outer horizons. Some of the insights obtained from the reconsideration and reformulation are as follows:

1) The distinction between/among the three psychologies is essential to the discipline of Psychology.

2) Every psychological research must be recognized as being carried out by an “I”, a research subject.

3) The distinction among the three psychologies is made solely by their differences of the objects of research (I-, You- and S/he/Anybody-) from the viewpoint of the research subject “I” of the respective research. Thus a psychology based upon the introspection of the experimental subjects other than the researcher “I” is definitely a psychology of others, never to be confused with a psychology of “I”.

4) The inter-exchangeability of pronouns I, You, and S/he, while narrating the research findings and also while reading them, does contribute to the exchangeability of research findings among the three psychologies. This could negatively lead to confusion but also could positively contribute to the integration of the three.

5) The psychological distance, which the research subject “I” will take regarding the research objects (I-, You- and S/he/Anybody-), could change with great flexibility. It could also change flexibly during the processes of “production”, “dissemination/ distribution” and “consumption” of the psychologies and psychological findings. This could also positively contribute to the integration of the three.

6) The cognition and expression of psychological findings and insights involves the essential relativity (relatedness) between the subject and the object.

7) The literary works of art, e. g., fictions such as novels, involve the greater freedom of changing perspectives, which will have a great deal to teach the future Psychology in terms of the “*free imaginative variation*” method.

8) The three psychologies do internally and mutually include each other, which fact, when fully explicated, will open up the new possibility for the integrated Psychology.

9) The three psychologies may have their own respective ramifications, expansions and/or extensions as We-, You-, They-, It- psychologies.

10) The clarification of the image of the future integrative Psychology will possibly bring about the stronger motives for, and the clearer images of, the necessary transformations from the present psychologies to the future integrative Psychology.

11) The central force of the transformation will be, in the belief of the author, the psychology of “I and You” based upon the *radical altruism*, about which the author has learned a great deal from George Kunz (1998).

12) The second dimension of distinguishing psychologies may be added beside the dimension of the three, i. e., the partition of the universe of psychologies into the four sub-sets, “Causal analysis science”, “Purpose achieving technology”, “Human understanding *Bildung*” and “Emancipation ethics actualization”. The whole set of psychologies may thus be partitioned into $3 \times 4 = 12$ sub-sets.

13) The local transitions between psychologies along the stages of the transformation must be studied with respect to each of the 3 and/or $3 \times 4 = 12$ psychologies. The transformation will be from the present chaotic state of psychology as a disordered accumulation of psychological studies to the well-ordered state of the fully developed integrative and systematic discipline of Psychology. This transformation of respective psychologies will be the road to overcome the “provinciality” of psychology as a whole toward the “universality” of Psychology.

14) For the transformation to be actualized, and for the “Unity through Diversity” in psychology to be realized, the psychology of diverse psychologists belonging to each of the three psychologies must be initiated and be fully developed.

15) The future integrative Psychology will be the integration of the three psychologies, which will incorporate the knowledge and the wisdom from the history of humankind as a whole, including those from natural, social and human sciences, not only of the West but also of the East and the South, as well as sciences and arts, and also as well as facts and fictions. The dream is rich. The road is far……

Becker, Ernst (1973) *The Denial of Death*. Free Press

Koch, Sigmund (1999) *Psychology in Human Context*. The University of Chicago Press

Kunz, George (1998) *The Paradox of Power and Weakness: Levinas and an Alternative Paradigm for Psychology*. The SUNY Press.

Yoshida, Akihiro (2001) My Life in Psychology: Making a Place for Fiction in a World of Science. *Journal of Phenomenological Psychology*. Vol. 32. No.2. 188-202